



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	折にふれて思いしこと
Author(s)	杉山, 滋郎; Sugiyama, Shigeo
Citation	科学技術コミュニケーション, 37, 65-67
Issue Date	2025-08
DOI	https://doi.org/10.14943/114631
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95909
Type	departmental bulletin paper
File Information	JJSC_37_06_sugiyama.pdf



折にふれて思いしこと

杉山 滋郎¹

Reflections from Time to Time

SUGIYAMA Shigeo¹

キーワード：CoSTEP, 課題, CoSTEP 私史

Keywords: CoSTEP, challenges, private history of CoSTEP

CoSTEP 20 周年を迎え寄稿の依頼を受けたものの、CoSTEP に関わっていたのは一昔から二昔も前のこと。その後の活動も詳しく知らなければ、いまの科学コミュニケーション界の事情も知らない。それなので、ここでは CoSTEP のたどった道筋をたどりながら、折々に心中に去来したことを記してみたい。20 年間の記録の一部として役立てばと願う。

ことの始まりは 2004 年秋だった。「科学技術コミュニケーター養成ユニット」を開設するとの事業計画で、競争的資金の一つである科学技術振興調整費に応募した。翌年の春に採択されると決まったものの、「科学技術コミュニケーター」なんて、事業計画書を書いた私にも、おそらくは大学当局にとっても、まことに得体の知れないものだった。

それだけに、まず「居場所」が定まらなかった。代表者が理学部所属だったことから、教員の居室と事務室は理学部内に確保してもらえた。しかし授業を行なう教室は、歩いて 10 分ほどかかる情報教育館の、3 階にあるスタジオ型多目的講義室などとなる。初年度はこの体制で終えたが、教員の居室と授業を行なう教室群が離れているのは何かと不都合である。そこで翌 2006 年春からは授業の教室を理学部 5 号館の教室群へと変更した。

「居場所」とは別に、「そもそも科学技術コミュニケーションとは何ぞや」という根底的な疑問が、学内の人たちから投げかけられた。昔からある普通の「コミュニケーション」とどう違うのか、科学技術と頭につくのだから「理系」か、それともコミュニケーションの一種だろうから「文系」か、科学に精通しない人にも担えるのか、などなど。「冷ややかさ」の籠もった問いかけだったと個人的には思う。

何を隠そう、私も答えがわかっていただけではない。これはどうだ、あれは…と、あれこれ行動や弁明をしながら、納得してもらえる（自分でも納得できる）答えを模索する日々だった。

それにしても、理学部内に活動の拠点を置き、理系の人々のすぐ近くで活動できたことは幸いだったと思う（図 1）。オープンキャンパスに合わせて理学部のイベントに協力するなど、理系の人々の期待に応え、またそれへの反応を感じながら、つまりフィードバックを得ながら試行錯誤できたのだから。理系の人々のほうでも、CoSTEP の活動を身近に見ることで、科学技術コミュニケーションは自分たちに関係するものだと、理屈はともかく、身体で感じてくれるようになったと思う。

2025年7月1日受納 2025年7月1日受理

所 属：1. 元 理学研究院教授, 元 CoSTEP 代表 (2005-13年度)



図1 CoSTEP の第1期生の修了式の様子

その反面、理学部を拠点に活動していたがゆえに、CoSTEPは「理学部のもの」との受け止めが学内で強まったように思えた。そこで、サイエンスカフェのゲストに招く研究者を学内の様々な組織に広げるよう配慮するなど、「脱理学部」を心がけた。全学の教員・大学院生を対象にしたイベントで、CoSTEPを身近な存在と感じてもらうことも狙った。国際的な学術誌に掲載されるような英語論文の書き方の講習会を、Nature誌の関係者を講師に招いて開催し、理学部講堂を満室にしたこともあった。

こうした活動を通して、CoSTEPは次第に「北海道大学のCoSTEP」と理解されるようになっていったと思う。2010年秋に鈴木章氏がノーベル化学賞を受賞し全学が喜びに沸き立ったとき、鈴木氏の業績を顕彰する活動の一翼をCoSTEPが担ったことも、そうした理解を拡げるのに与ったであろう。

2009年度末をもってCoSTEPは振興調整費による事業を終了し、学内資金により運営される組織（高等教育機能開発総合センターに属する一組織）になった。それに伴い2010年4月から、教員の居室や事務室そして授業を行なう教室も今の場所に移る。「居場所」が理学部から全学的なセンター内に移動したことも、CoSTEPは「北大全体のもの」という認識が広がるのを後押ししてくれた。

その反面この「居場所」の変更は、科学技術コミュニケーションと密接に関係する理工農医薬獣…など理系部局からCoSTEPが「遠ざかる」効果も生んだように思う。科学技術コミュニケーションでなく、コミュニケーション一般に力点に移る効果、とも言えようか。

またCoSTEPは修了生を多く輩出し、「科学技術コミュニケーターネットワーク」も充実させてきた。仲間が多いことは心強い。しかしそれは反面、「仲間うちでまとまる」すなわち内輪で評

価・承認しあう傾向を強めるのではとも思うようになった。

科学技術コミュニケーションは「理系」の人々からの支持と支援があつてこそ成り立つものだろう。そのためには「科学技術」と「コミュニケーション」がどう繋がればいいのか——こんなことを考え始めてまもなく、CoSTEP を辞すことに¹⁾。

それからはや十数年、烏^う兔^と匆^{そう}々。

注

- 1) このころに書き留めた「CoSTEP 私史」(<http://hdl.handle.net/2115/56554>) も併せて読んでいただきたい。